

教学半也



ご意見はコチラから

令和7年12月11日

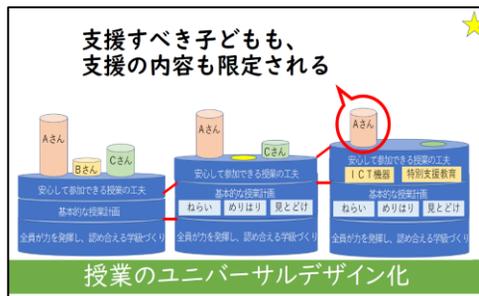
No.17

全ての読者対象

第4回授業づくり研修会 令和7年10月27日（上伊那）/30日（諏訪）

困った子ではなく、困っている子

授業づくりの基礎として、臨時的任用職員を中心に参加を呼び掛けた研修会の最終回です。特別支援教育の視点から、児童生徒の実態把握と授業のユニバーサルデザイン化を大切にしたい授業づくりについて、講義・演習と指導主事との懇談で共に学んだ研修会について報告します。



食塩とミョウバンの溶け方を比べて

鍵盤ハーモニカを鳴らして

【参加者の感想】

前半の講義・演習では、読みや書きに困難さがある子供の思いや感じ方を疑似体験し、「困っているのは子供だ」と実感できました。後半の教科別相談では、実際に実験をして、「どうしてそうなるんだろう」といった子供の問いを見出すための導入について考えることができ有意義な時間になりました。



困り感のある生徒に対してどのような支援をするのかを、本人の思いを置き去りにして、教師の主観で決めていたことに気がつきハッとしました。また、「交流及び共同学習」という学び方を初めて知り、これまでねらいをもった交流ができていなかったと反省しました。特別支援学級の先生と相談して、安心できる時間になりたいです。



教職員にとって「この子の支援に困っています」が、相談の入口になることは自然なことです。その困り感をひとりで抱え込まず、同僚や外部専門家にも相談できる学校であることが、子供にとって安心できる学びの場づくりとして求められます。

特別支援教育を障がいのある児童生徒に対する特別なものとせず、通常の学級での指導はもちろん、外国人児童生徒等や不登校支援等の児童生徒を理解する視点の一つとして、「この子が困っている」という視点を校内で共有していただければと思います。

研修会の中で扱った『授業のユニバーサルデザイン振り返りシート』がダウンロードできます。定期的に、ご自身の取組を振り返ってみましょう。【振り返りシートの一部】

『振り返りシート』

長野県総合教育センターHP



解説編との併用がポイント！

学習環境	黒板に前時の消し残しがなく、きれいになっている
	授業のはじめに、机に必要な物がそろい、不要な物が置いてないか確認している
伝え方	「授業の流れ」や「活動の手順とゴール」を示し、見通しがもてるようにしている
	座席決めや班編成は、子どもの特性に応じた配慮をしている
	声の大きさやトーンを、伝える内容によって変えている
学習環境	指示は、子どもの注意を向けてから、わかりやすい言葉ではっきり短く伝えている
	大事なことは板書等で示している（ページ・学習課題・活動の手順とゴール等）
伝え方	視覚的な提示を工夫している（実物・写真・ビデオ・絵カード・文字カード・表情・動作・指差し等）

子供たちが「人間の弱さ」に向き合えるような工夫

N小学校4学年担任のM先生は、教材「まあ、いいか。」(光村図書)【内容項目：節度、節制】を活用し、道徳科の授業を行いました。授業の中でのキラリ☆ポイントを紹介します。

1 【授業の導入場面のM先生の問いかけ】

みんなの「まあ、いいか」についてアンケートをとりました。宿題やお手伝いとか、いろいろ書いてありました。実は、先生もあってさ。やらなくちゃいけないこととか、面倒で、つい後回しにしちゃうことあるんだよね。みんなは、どう？

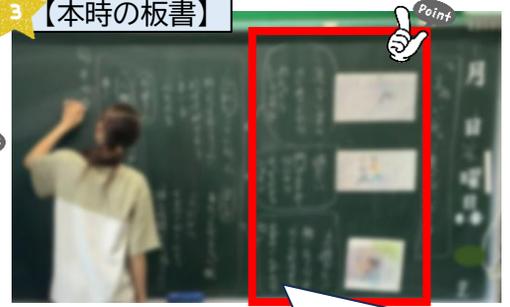
2 【登場人物のよしきさんの気持ちを考える場面】

(行ったことのない遠くの場所へ行ったときのことを考える中で)
先生：「まあ、いいか」と思って行ったら、どんなことになった？
A児：怖いことになった。
B児：行ったことない所に行って怖かった。
先生：Cさん、どう？
C児：迷子になっちゃった。
先生：迷子は怖いよね。迷子になったこと、ある人いるかな？
C児：(笑いながらずく)

【キラリ☆ポイント！の解説】

道徳科では、自他の思いや考えを交流する中で、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深め、更に自分で考えを深め、判断し、表現する力などを育みます。M先生は「なかなか実現することができない人間の弱さ(人間理解)」を子供たちが理解できるように、★教師にも弱さがあることを語ったり、★登場人物の立たされた状況と自分の経験とを重ねられるような問い返しをしたり、★人間の弱さがよく見える板書をしたりする工夫をしていました。子供たちが素直に人間の弱さを語る姿が印象的でした。M先生のキラリ☆から学びたいと思います。

3 【本時の板書】



登場人物のよしきさんの人間の弱さについて考えられるように「面倒くさい」、「遊びたい」、「門限、決められてないし」などの気持ちを、吹き出しを使って板書します。

通常学級における特別支援教育の視点の大切さ

～見る・聞くの意欲を育み、授業にいかす～

A小学校のN先生は、採用2年目で2年生の担任を務めています。1年前の初任次に拝見した授業では、N先生自身が「最初はガチャガチャした授業で、自分でも情けない状態でした」と語るような苦しい場面を見ることもありました。子どものことを知りたい、授業をもっとよくしたいと考えたN先生は、校内研究で柱に据える「通常学級における特別支援教育」の視点で自身の支援観を見つめ直し、個別の指導計画を作成したり、校内の先生方の力を借りたりしながら、授業づくりと、その土台である学級づくりを行っていきました。

2年目の今年度、授業で目を引くのは『学級の強みを授業にいかす指導』です。校内研究で『本人の強みをいかす自立活動』の視点を学んだN先生は、「視覚情報が有効な児童が多い」「聞き分ける力はあるそうだ」という学級の『強み』を授業にいかそうと考えていきます。N先生が、学級のよい部分をさらに伸ばし、効果的に授業にいかしている様子を紹介します。

【キラリポイント】

学級の実態把握を重ねる中で、見る力・聞く力には個人差があり、学びに対する意欲も様々であると捉えたN先生は、授業の中に『よく見るとわかる・よく聞くとできる遊び感覚の活動(自立活動)』を日常的に取り入れ、見る・聞くの力と意欲を育てています。この日、授業開始前に行ったのは、メトロノームを使ったリズム遊びです。子ども達は、N先生が指さした計算を『見て』互いの声を『聞いて』、体を揺らし、声の調子を変えて九九を暗唱します。N先生は、そんな子ども達に、「すごくよく見てるね」「難しいけどよく聞いているよ」と、見る・聞くの準備が整うように声を掛けていきました。

この活動によって、教師が教材を全体に提示する場面【写真①】で体乗り出して見たり、大切なことを、あえて小さな声で聞かせる場面【写真②】では、静かに耳を澄ませて聞く子ども達の姿につながっていきました。

学級の強みをいかし、子どもと息の合った授業を展開するN先生の取組の良さを、校内の先生方で話題にしてみてください。

写真①



写真②



地域展開になるとどう変わる？

	部活動	地域クラブ（例）
運営団体	中学校、部活動運営委員会	協議会で決定(市町村教委、民間企業、総合型地域スポーツクラブなど)
実施主体	各部	協議会で決定(スポーツ協会、スポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブ、新規クラブなど)
募集生徒	当該中学校の生徒	協議会および各クラブで決定(学区内、市町村内、郡内など)
事務的役割	学校事務、各顧問、保護者会	運営団体、各クラブ
指導者	各顧問、部活動指導員、外部指導者	地域指導者(兼職兼業の教員含む)
活動費(指導者謝金含む)	学校からの補助、部費	運営団体からの補助、クラブ会費
保険	日本スポーツ振興センター等	スポーツ安全保険等

管内の地域クラブの動き(10月末日現在)

各市町村内で先行実施クラブとして活動中

- 岡谷クラブ(岡谷市：軟式野球)
- 諏訪市卓球協会(諏訪市：卓球)
- リュシオスポーツクラブ(辰野町：バドミントン、陸上)



各協議会内で先行実施クラブの立ち上げやクラブ認定を準備中

- 茅野市、伊那市、下諏訪町、箕輪町、宮田村、大鹿村、豊丘村、高森町、下條村、根羽村、売木村、阿南町、喬木村、泰阜村、天龍村

各市町村で立ち上げた（認定した）地域クラブとして活動中

- 富士見町・原村(広域連携)(軟式野球、サッカー、合唱、科学、吹奏楽、バドミントン、スケート)
- 駒ヶ根市(剣道、バドミントン、サッカー、バスケットボール、ソフトテニス)
- 飯島町・中川村(広域連携)(男子バレーボール レッドディアーズ)
- 南箕輪村(バレーボール、ソフトテニス、バスケットボール、サッカー、軟式野球、卓球、剣道、吹奏楽、美術)
- 飯田市(20クラブ) □ 松川町(松川CLUB) □ 阿智村(総合型地域SC委託)

情報交換会で出された課題

- ・ 平日の地域展開（活動時間帯、広域での取り決めなど）
- ・ 指導者への謝金をきちんと支払わなくてはならない
- ・ 指導者の質の向上、保護者等の協力体制
- ・ 財源確保（国からの補助金の情報）
- ・ 広域連携での各市町村の費用負担の割合、移手段
- ・ クラブ運営できる人材の不足
- ・ 運営団体および実施主体の決定方法
- ・ 中体連参加条件のハードルの高さ（指導者資格など）



情報交換会において、活発な意見交換が行われ、上のような課題が出されました。国、県、市町村が協力、連携して、課題を一つずつ解決していけるよう、協議を続けていきます。続報はコラム②にてお届けします。

部活動地域展開情報コラム①

部活動が地域クラブ活動に！

「新たな地域クラブ活動の環境整備」に向けて、各市町村が部活動の地域展開を進めています。南信教育事務所としては、本県の方針「令和8年度末を目途に休日の学校部活動の地域クラブ活動への展開完了」の実現に向けて、各市町村の取組を支援してまいりました。

9月26日（金）に上伊那地区、10月2日（木）に諏訪地区、そして10月17日（金）に飯田下伊那地区（web）で部活動の地域展開に関わる情報交換会を開催しました。各市町村の担当者やコーディネーターが集まり、それぞれの地域のスポーツ・文化芸術活動の環境整備に向けて、熱心な意見交換が行われました。

この号より、事務所だよりのコラムとして部活動地域展開の情報を紹介していきます。第1弾は部活動地域展開の概要と管内の取組、情報交換会で話し合われた課題などを紹介します。



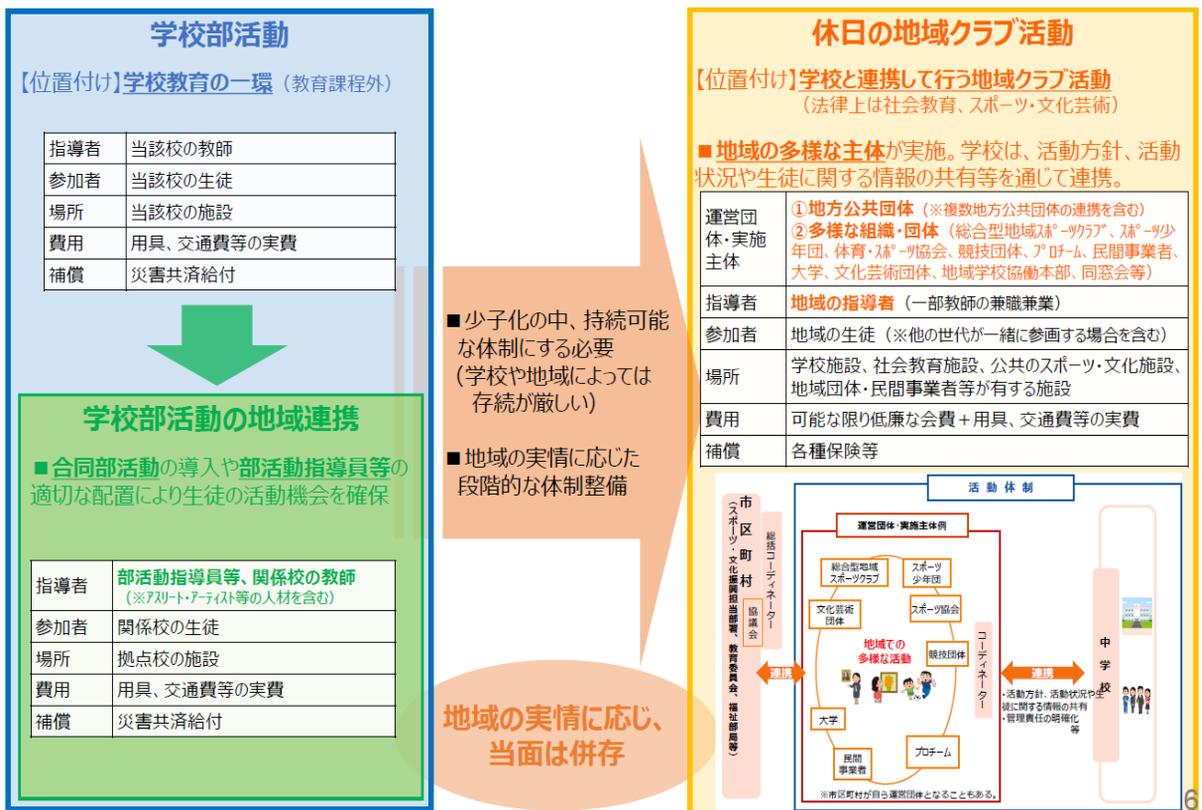
諏訪地区の情報交換会の様子

部活動の地域展開って？

今まで中学校が担っていた部活動を学校と連携して行う地域クラブ活動に『地域展開』していきます。南信地区では、各市町村教育委員会が中心となり、中学生のスポーツ・文化芸術活動環境を整えるため、それぞれで協議会を設置し、準備を進めています。

県としては令和8年度末を目途に休日の部活動の地域展開完了を目指しています。

学校部活動の地域連携、地域クラブ活動への移行の全体像（イメージ）



部活動の地域展開に係る協議会

保健厚生課学校体育係資料より

管内の市町村の協議会では、市町村毎に異なりますが、市町村教委、中学校、スポーツ協会、文化芸術活動団体、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ推進委員会、教育委員、社会教育委員などの方々がメンバーとなり、どのような「地域クラブ」として展開していくか、どこが運営団体や実施主体を担っていくのかなどを検討しています。